第24回教育実践功績表彰
活動内容資料集

No.	学校名	チーム・グループ名
1	太秦小学校	みどり・きみどり・よりどりみどり
2	嵐山東小学校	さくら幼稚園・嵐山保育園・嵐山東小学校 架け橋プロジェクトチーム
3	大枝小学校	コネクトエデュケーション実践チーム
4	京都御池中学校	フリーアドレス導入プロジェクトチーム
5	洛南中学校	「洛南マルシェ」プロジェクトチーム
6	大淀中学校	MLA部 （PBIS・品格教育・SEL・ピアサポート・協同学習）
7	洛西陵明小中学校	非認知能力開発委員会
8	中学校伏見支部	中学校伏見支部研究主任会
9	呉竹総合支援学校	くれたけ研究推進委員会
１０	西京高等学校	西京生成AIプロジェクトチーム

太秦小学校　みどり・きみどり・よりどりみどり

こんな活動です	自分の学びたいこと・やりたいことを見つけ、みんなで学び高め合う ～教職員としての自覚をもち、資質・指導力を高め続けられる教職員を目指して～

① 活動のねらい	みどり（経験年数５年目以下）きみどり（経験年数６～９年目）の教職員が中心となって、互いに学び合ったり、管理職・他の先輩教員も巻き込んで学級経営や授業の指導法などを学び合ったりすることで資質・指導力を高め続けられる集団となることを目指している。
② 活動内容	◎みどり（経験年数５年目以下）　☆きみどり（経験年数６～９年目） ◎若手教員による授業づくりと学級経営 若手と先輩教員で授業の改善ポイントを話し合う。学級経営については年間を通して学期ごとに応じたテーマを研修支援サポーターや管理職・先輩教員から学ぶ。 ◎支援の必要な児童へアプローチについて 各クラスの気になる児童や悩みを事前にアンケートでリストアップし、悩みが多く出た内容について、先輩教員や SSW より様々な支援方法や支援体制を学ぶ。 ☆得意な教科、分野の授業づくり・実践を共有 学びたいこと・スキルアップしたいことを、その教科、分野を得意とされる先輩教員から実践や授業づくりのポイントを学ぶ。 ☆授業公開・参観 管理職をはじめ他の先生方に授業を参観していただき、授業改善のポイントを話し合う。また、自ら他の先生方の授業を参観し、学び高め合う。 ※これらのチームの活動は、経験年数での括りはあるが、テーマによって自由に互いの研修にも参加できる「よりどりみどり」の活動になっている。若手から中堅までの教員がベテラン教員をも巻き込みながら主体的に学び合い、互いの成長を支え合う姿勢を大切にして活動している。
③ 活動の効果等	先輩教員から様々なアイデアをもらうことで自分の授業改善に役立てることができた。支援の必要な児童に対する支援では、具体的な声かけや支援の方法を知ることができた。学んだことを日々の学級経営に生かすことで、困りのある子に対する支援はもとより、他の学級の児童にとっても役立つ支援につながっている。 また、互いの授業づくり・実践を共有することで、毎回新しい発見があり、すぐに授業での実践に活かしたいと感じた。活動の後は「この先生に相談すればヒントをもらえる」と考え、相談にいき、授業を見に行く機会にもつながっている。

活動の様子

先輩教員と授業づくりについて話し合い、実際に授業を参観させていただいた。活動が目的化することなく、つけたい力の習得につながっている授業であり、そのことを子どもたちの姿から実感することができた。

国語科について、問題解決的な学びにつながる導入の工夫や、子どもが主体的に学びに向かうための授業構成について意見交換を行った。実践的なアイデアを共有することで、今後の授業づくりに向けた視野を広げることができた。

嵐山東小学校・嵐山保育園・さくら幼稚園架け橋プロジェクトチーム

こんな活動です	私立公立の枠を超えて幼保小連携に取り組んだ。 令和５年度の取組で共有した幼稚園・保育園のめざす子どもの姿「自分のことを自分でできる力」「他者とよりよくかかわることができる力」と本校のめざす子ども像との共通点「他者とのつながりをつくる」こと、「子どもの主体性を育む」ことの2点を研究の重点として令和６年度の「架け橋プロジェクト」をすすめた。

① 活動のねらい	本校では、幼稚園・保育園と小学校の円滑な接続を目指し、「架け橋プログラム」を実施。5歳児と１年生の交流を通じて、子どもたちの主体性や自己表現力、他者との関わりを育むことを目的とした。
② 活動内容	１．昨年度の取組 年間を「計画期（4～5月）」「つなげる期（6～10月）」「主体期（11～3月）」の３期に分け、段階的に交流を深めた。 ４月：幼保小交流年間計画を作成・共有。既存の授業や行事に交流を組み込むことで教職員の負担を軽減。 架け橋カリキュラム作成開始。 ７月：生活科「なつとともだち」水遊び交流。１年生の発案で保育園児を招待し、自然な関わりが生まれた。 ８月：保育参観・合同研修会を実施。教職員間の交流と今後の方針確認。 10月：運動会に５歳児を招待。１年生がメダルを用意し、相手意識をもった関わりが見られた。 11月：架け橋カリキュラム案を共有。これまでの取組をふり返り最終調整へ。 12月：生活科「あきとともだち」では、１年生が手作りおもちゃで５歳児を招待。関わり方や声かけに工夫が見られた。 １月：架け橋カリキュラム完成。２月の研究発表会にて参会者に配布。 ２月：「あらひがはたのしいよの会」を開催。学校探検や体験活動を通じて、入学への期待を高めた。新入学児童とその保護者を対象にオープンスクールを実施。保護者アンケートでは、学校の様子がよく分かったという回答が多く見られた。 ２．今年度の取組（令和７年度） 昨年度に作成した「架け橋カリキュラム」をもとに、活動の実施と改善を行っている。教職員間での連携を強化し、より効果的な交流活動を展開している。

活動の様子

８月架け橋研修会　保育参観の様子

１０月運動会　かけはしレースの様子

大枝小学校　コネクトエデュケーション実践チーム

こんな活動です	確かな学力・学び方を身に付け、自分の学びの積上げができる子の育成 ～スキル学習を基盤とした算数科とＩＣＴを学習ツールとした国語科の授業改善～

① 活動のねらい	本活動では、研究教科である算数科と国語科の研究を通して児童が確かな学力と学び方を身につけ、自分の学びを積み上げる力を育てることを目指している。また、学び方を振り返ることで学習方法を積み上げることも大切にしている。さらに、児童が安心して学習に向かえるよう、学級経営や人権教育を基盤とした「安心・安全の学習集団」づくりを重視している。これらの取組により、児童が自ら学びに向かい、未来に向かって成長していける力を育成するとともに、授業力の向上と教師の働き方改革にもつなげていくことを目指している。
② 活動内容	児童が確かな学力と学び方を身につけ、自ら学びを積み上げていける力の育成を目指す。 【算数科】 ・スキル学習を基盤に、基礎・基本の定着を図る。 ・他者参照（友達の思いや意見、考えを参照する活動）や協働的な学びを取り入れ、思考力を育てる。 【国語科】 ・ICT ツールを活用し、児童が自分の考えを整理・表現する力を育成。 ・学びの積み上げを意識した授業づくりを行う。 【その他】 ・「授業のポイント集」としてパワーポイントにまとめ、取組による成果と課題を明確にしている。 ・「一人ひとりに適した学習環境」と「『わかった』『できた』の実感」を大切にした授業を展開。 ・振り返り活動を通して、児童が自分の学習方法を見直し、自己理解・自己調整力を育てる。 ・児童の振り返りは、ロイロノート（学習支援クラウドサービス）上の「進捗状況表」を使い、友達の振り返りや指導者のコメント（評価）を閲覧できるようにすることで今後の自分の学びに生かすことができるようにしている。 ・児童の主体的な学びを支えるとともに、授業力の向上と教師の働き方改革にもつなげる。
③ 活動の効果等	【児童】 ・児童が他者の考えに触れることで自分の学びを深め見方や考え方の広がりが見られた。 ・ICT を学び合いのツールとして活用することで自分の学習状況を自己理解し友達との比較や他者参照を通じて学習を進める力がついてきた。 ・「じっくり考えたい」「友達と意見交換したい」など、児童の学びたい意欲を尊重した授業展開が可能になった。 【教員】 ・児童の学習状況を確実に見取り、集団での解決を教師がコーディネートすることの重要性を再認識できた。 ・学力低下が見られた児童に対して ICT 活用や指導法の見直しにより多様な考え方に気づき、既習内容を活用して解決に導こうとする姿が見られるようになった。 ・教科を越えて、教材研究や児童理解の重要性が教職員間で共有されたことで教科連携の意識が高まり、授業改善の視点が広がった。 ・国語科、算数科に留まらず他教科にも活用できないか各教職員が思考し、新しいことに挑戦する意識が芽生えている。 ・ICT活用のさらなる可能性に気付き、働き方改革（時短ややりがい）につなげる意識が高まった。

活動の様子

６年算数科 研究授業『分かるまで対話！』

６年国語科 事後協議会『ICT 活用の可能性！』

京都御池中学校　フリーアドレス導入プロジェクトチーム

こんな活動です	「職員室の一部にフリーアドレス制の導入」プロジェクト ～すべての教職員が働きやすい職員室を目指して～

① 活動のねらい	市内有数の大規模中学校（生徒 666 人）で、小学校６年生（児童 311 人）も同じ校舎で学ぶ本校は、教職員の数（計 100 人）が多い。昨今、多職種連携も進み、年々教職員が増加している今、受け入れる側の学校ではスペースと机のやりくりに困慮する実態もあった。そこで「職員室の一部にフリーアドレス制を導入する」ことにより、デスクに関する諸問題の解決を狙ったものである。
② 活動内容	フリーアドレス導入 PJ チームが中心となり、作業は小中学校全体で行った。 １．フリーアドレス制を導入する目的と適応範囲の設定等、構想と計画 ２．学校中の大掃除と不要品の処分 ３．職員室のレイアウトの検討・決定 ４．ICT 環境の整備・席替え ５．フリーアドレスエリアの運用ルールの設定 ６．管理及び個別対応　（令和６年１０月より活動開始）
③ 活動の効果等	フリーアドレスの特徴である、スペースを有効活用できるメリットを活かし、昨年出来なかった、「教職員全員に働くスペースを提供する」ことを達成し、職場環境の底上げの改善を行った。また旧パソコンルームの机・椅子を流用することにより最小の予算で行うことができた。 フリーアドレス席は、このエリアの対象者（教諭・常勤講師・成績を付ける非常勤講師以外）が優先であるが、空席がある場合は、気軽に他の教職員が打合せを行い、また複数人で作業を行うことが出来るスペースとなった。このことにより、異職種間でのコミュニケーションが促進され、新たなコミュニケーションスペースとしての性質を持つようになった。チーム学校として様々な課題への対応が求められる中、情報交換や意見交換を経て共通認識を持ち、議論を深めていくことは意義のあることだと考える。

活動の様子

Before（情報保護の為、画質を落としています）

After　新設フリーアドレスエリア 12 席

洛南中学校「洛南マルシェ」プロジェクトチーム

こんな活動です	コラボレーション力で広げる学校教育の可能性 ～社会貢献×民間企業×地域＝無限大～

① 活動のねらい	本校では生徒に身につけさせたい資質能力として、「コラボレーション力」をあげている。民間企業や地域の協力を得ながら、地域交流と社会貢献を促進することをねらいとして昨年度より「洛南マルシェ」に取り組んでいる。企業・地域と学校とのコラボレーションを通して、学校だけでは実現できないさまざまな教育活動を展開し、学校教育の可能性を広げていくことを目指して取り組んでいる。
② 活動内容	１．能登半島地震の復興支援についての検討 ・支援物資を募る　・輪島中学校とのオンライン交流 ２．民間企業への協力依頼 ・義援金を募る　・「洛南マルシェ」への出店依頼 ・チャレンジ体験の事前、事後学習への協力 ３．地域の保育園、幼稚園、こども園への協力依頼 ・「洛南マルシェ」への参加要請（家庭科の保育交流を兼ねる） ４．「洛南マルシェ」を軸とした総合的な学習の時間のカリキュラム作成
③ 活動の効果等	今回の取組を通して、企業や地域にとって、学校や子どもたちに関わることが大きなメリットであることを知ることができた。企業や地域にどのように関わってもらうことが良いのか、学校側が明確に示すことで、より学校教育の可能性を広げることができるのではと感じている。企業に義援金を募った結果、１つの学校の募金活動としては考えられないほどの義援金を集めることができ、復興支援に貢献することができた。洛南マルシェ当日に向けて、生徒は楽しみながら準備を進めていた。当日地元の子どもたちを迎え、ともに活動する様子はこれまでのどの取組よりも充実したものになっていることは、当日の生徒や子どもたちの表情やその後の振り返りからもみとることができる。今後は「洛南マルシェ」を学校としての３年間の総合的な学習の時間の軸に据え、３学年すべての生徒が関われるようにしていく。

活動の様子

洛南マルシェ当日の様子	洛南マルシェ当日の様子

大淀中学校　MLA 部（PBIS・品格教育・SEL・ピアサポート・協同学習）

こんな活動です	学び続ける集団づくり　～個が活きる集団を育てる～

① 活動のねらい	学び続ける集団をつくるためには、「個が活きる集団を育てる」必要があると考え、MLA（マルチレベルアプローチ）というプログラムを導入している。まずは生徒に、よい行いとは何なのかを提示し、よい行いを増やすためにはどのような行動・言動をすることがよいのかという人間関係を構築する方法を教え、それを実際に行事や授業の中で実践させている。そして、学んだ方法を生かして実際に素敵な行いをした生徒をほめ、より一層よい行動が増えていくことをねらいとしている。また、一人でできないときには誰かに助けを求め、それぞれの長所・短所を認めあい、支えあうことで生徒会目標である「全員が友達」になれる集団づくりを目指している。 今年度からはMLAを活性化するために、チーム担任制を導入し、総合的な学習の時間には縦割りでゼミ形式の探究活動を行っている。
② 活動内容	◆PBIS（Positive Behavioral Interventions and Supports） 子どもたちに望ましい行動を示し評価することで、問題行動の減少を図る。 「幸せの花束カード」を実施。シールがたまると昇格していく。 ◆品格教育　正しいことやよいことを学び、主体的に行動し、それを習慣化することで、人格を完成させていく。月目標を提示し、それに向けて道徳や生徒会活動を行う。 ◆ＳＥＬ－８Ｓ（Social and Emotional Learning of 8 Abilities at School） 自己の捉え方と他者との関わり方を基礎とした社会性（対人関係）に関するスキル、態度、価値観を身につける学習を行う。 ◆ピアサポート　仲間を支えられる人間、ピアサポーターを育てる。 ◆協同学習　生徒全員で解決する授業を行う。
③ 活動の効果等	【生徒について】 友だちの長所や短所を受け入れ、相手に適した言い方やかかわり方を工夫して友だちと付き合えるようになってきている。また、相手の困りを理解し、自ら声を掛け合い、支えあう姿が見られる。人と付き合うコミュニケーションスキルが向上し、個性を受け入れられる集団ができてきている。 【教職員について】 教職員全員で意見を出し合い、力を合わせてここまで進めてくることができた。これまでの経験で生徒指導・学習指導をするのではなく、MLA の理論を研修し、実践に生かしている。MLA の理論を研修できる次世代の若手育成も行うことができた。

活動の様子

校内掲示板

PBIS や SEL、ピアサポートで培った力を使って学習に取り組みます。

洛西陵明小中学校　非認知能力育成委員会

こんな活動です	非認知能力の可視化から始まる学校づくり ～子どもの力を本気で伸ばすカリキュラムマネジメントの実践～

① 活動のねらい	本グループでは、学校教育目標(目指す子ども像)を非認知能力と紐づけ、それを可視化しながら、資質・能力の獲得に焦点をあてたカリキュラムマネジメントを実践し、自己実現を図る子の育成を目指している。
② 活動内容	(ア) 教職員研修 ・ 年間 10 回実施予定。 ・ 「非認知能力とは何か」「ツールの活用方法」から「アセスメント結果の共有・分析」まで。 (イ) 児童生徒のアセスメント ・ 外部ツール(Edv Path)を活用して、オンライン上で児童生徒自身が現状を評価。 ・ (児童生徒) 個人の結果を即時閲覧可能→自分の強み・伸びしろを理解(メタ認知)。 ・ (教職員) 学級・学年・学校の現状を把握→課題解決に向けた支援策/カリキュラムを検討。 (ウ) 学校課題の共有と対策(例) ・ 「セルフマネジメント」の項目が低いことを子どもたちも含めて共有。 ・ 子どもが作成し、教員と確認し合うスケジュール管理シートの導入。 ・ 次のアセスメントで「セルフマネジメント」値の向上。
③ 活動の効果等	・ 半信半疑だった教員も、アセスメントの結果や実際の子どもたちの変化を感じることで、やりがいをもって取り組み始め、主体的に課題解消に向けた取組案を検討するようになっている。 ・ (結果的ではあるが、) 本取組を実践し始めた時期と同時期に、確プロを根拠とする認知能力の向上が見られるようになった。 ・ (結果的ではあるが、) 本取組を実践し始めて以降、9 年生の不登校生徒の割合が減少している。 ・ 今後、その他学校生活全般に変化との関連性を模索する。

活動の様子

なぜ今、非認知能力なのか？_講義中

非認知能力アセスメント_回答中

中学校伏見支部研究主任会

こんな活動です	「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善、「総合的な学習の時間」の探究活動の再考を牽引できる研究主任としての資質能力の向上

① 活動のねらい	「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善、「総合的な学習の時間」の探究活動の再考を牽引できる研究主任としての資質能力の向上を目指す。
② 活動内容	【中学校伏見区研究主任会】 ・Ｒ６年度は、支部研究主任会で勉強会や、課題についての協議を行い、Ｒ７は、総合教育センター研究課の「グループ研究」の指定いただき、以下のような計画の元、資質能力の向上を図り各校の授業改善を牽引しようとしている。 ・6 月 23 日　支部研究主任会　「学生と企業をつなぐ」(e-donuts 藤原さん) ・6 月 27 日　開建高校総合の時間視察、協議「高校の探究学習」(宮越教頭) ・7 月 29 日　大阪市　類スクール視察、協議「異学年グループの探究学習」 ・9 月～　大阪府泉大津市立小津中学校共創プロジェクト視察、協議 ・10 月以降　各校での総合的な学習の時間の年間計画、単元構想を再考する ・後期の研究主任会では、総合的な学習に時間の構想に向けて情報交換や協議を進めると同時に、「主体的・対話的で深い学び」についても勉強会を進めていく計画である。
③ 活動の効果等	【研究主任会】 ・Ｒ６は情報交換だけでなく主体的に勉強ができる研究主任化へと形を変えることができ、それぞれの学校の研究を進めるにあたり、自身の研究主任としての資質能力について課題認識し、自己研鑽に前向きに取り組むことができた。 ・Ｒ７は総合的な学習の時間を探究学習へと改善するために、積極的に視察等に参加し、自校の総合の見直しを図る際の研究主任としての資質能力の向上に努めている。 【各校】 ・研究主任がリーダーとなり学校の研究を牽引するにあたり、自信を持って提案課題解決に向かう姿勢がより見られるようになった。 ・校長とも課題を共有し、より方向性を示せるようになった。

活動の様子

開建高校での授業視察の後の協議の様子

呉竹総合支援学校　くれたけ研究推進委員会

こんな活動です	子どもも大人も育つウェルビーイングな学校づくりに向けて、授業研究を中心に、ウェルビーイングの向上について考え・実践しています

① 活動のねらい	定期的に会議を開き、各研究グループの意見を吸い上げ、整理し、新たな提案等を行い本校の研究を推進していくことを活動の目的としている。主なねらいとしては次の３点である。 ・一人一人の児童生徒のウェルビーイングな姿を教職員で考え、授業や生活の中に落とし込み、授業を通して実現していく ・授業実践を通して、達成感ややりがい等、教職員一人一人のウェルビーイングも高める ・強みからスタートするポジティブアプローチを用いて授業づくりを行うことで、その考え方や視点を、他の授業にも般化できるようにする
② 活動内容	昨年度は、児童生徒と教職員のウェルビーイングの向上をめざして３つの仮設を立て、ウェルビーイングの有効な因子と言われる「やってみたい」「なんとかなる」「ありがとう」「自分らしく」の４つの姿を引き出す授業づくりを提案した。昨年度の取組を踏まえ、今年度は、ウェルビーイング的な考え方であるポジティブ心理学の４－D モデル（※１）を参考に、一人一人の児童生徒の強みからスタートする“幸せの道しるべ（MAP）”を提案した。「今の幸せが将来や周囲の幸せにつながり、それは社会や地域の幸せにつながる」という考えに基づくものである。 ※１　４－D モデル…１発見 Discovery（強み・価値を発見する）→２夢 Dream（どうありたいか最大限の可能性を描く）→３設計 Design（現実的達成状態を共有化する）→４実行 Do（具体的な行動や変化へとつながる活動）の順に考えるポジティブアプローチ（４の実行（Do）は、本校独自に設定）
③ 活動の効果等	昨年度から、仮説を立て、実践、評価を行うことで、ウェルビーイングについての理解や意識の高まり、授業を通して子どもたちのウェルビーイングが高まること、またグループでの様々な話合いが教職員の喜びや充実感となり、教職員のウェルビーイングにもつながっていることをアンケートの結果等により客観的に確認できた。今年度も本校ならではの授業研究を通して学校全体のウェルビーイングの向上を図りたい。

活動の様子

昨年度の成果報告会にて（ポスター発表）
一年間の研究グループの研究実践を、ポスターにまとめ、発表しました。
「やってみたい」「なんとかなる」「ありがとう」「自分らしく」の全２１グループが発表し、お互いに見合い、交流することで、各グループの実践について知り、考えを深めていきました。

今年度の研究実践より
中学部の研究グループ（ミュージック）での研究授業の様子です。
対象生徒のウェルビーイングな姿は、
☆身体表現できることが増え、周りの人と活動を一緒に楽しむ
☆自分から取り組める活動や時間が増える　　です。

西京高等学校　西京生成ＡＩプロジェクトチーム

こんな活動です	生成 AI を活用した主体的・探究的な学びと教育業務の効率化をめざして

①　活動のねらい	本校では文部科学省から令和５年度に生成 AI パイロット校に採択されたことを契機に、生成 AI（ChatGPT や音声生成 AI など）を教育活動および校務に積極的に取り入れ、生徒一人ひとりの学びの質を高め、学習意欲を引き出すための活用法を模索してきた。授業においては、AI との対話や出力結果の分析を通じて、思考力・判断力・表現力を育成するとともに、社会とのつながりを意識した探究的な学びを実現している。さらに、生徒自身が問いを立て、AI による即時的なフィードバックを得ながら試行錯誤を重ねることで、主体的に学ぶ姿勢の育成を図っている。また、教職員の業務軽減の観点から、教育の質を維持しつつ、柔軟な指導を可能とする環境整備を進めている。授業や校務における生成 AI 活用を推進し、こうした実践事例の蓄積・校内共有を活発に行うことを目的として本チームを設立した。
②　活動内容	本チームでは、教科・探究活動・校務支援の各分野において、生徒や教職員が生成 AI と関わりながら主体的に学び、活用し、その実践を校内で情報共有することを主な活動としている。生徒が AI と関わりながら主体的に学ぶことを実現するため、チーム所属の教員が以下のような授業実践と業務改善に取り組んだ。 情報科では、Raspberry Pi とカメラを用いた画像認識モデルの作成・検証を通じ、生徒が AI の機械学習のしくみを実践的に理解する授業を行った。公民科では、模擬裁判や資産形成ワークで AI を活用し、社会課題を多角的に考察する学習活動を行った。ゼミ活動では、裁判の判例をもとに AI に判例文の生成させる取組を通じて、論理的思考や情報活用能力を養う活動を行った。さらに、英語科では、京都大学と連携し、内閣府戦略的イノベーション創造プログラム（SIP）の一環として共同開発している英作文添削 AI を活用し、生徒が作成した英文に対して訂正理由を含むフィードバックを提示し、生徒の理解を深める指導を行った。 また、授業準備を含む業務の効率化に向けた取組として、英語科では音声生成 AI を用いてリスニング教材を作成し、情報科では文章生成 AI を活用して人工知能に関するプログラム教材を作成した。さらに、校務においては、会議の録音データを AI で文字起こし・要約をし、議事録を作成することで業務の効率化を図っている。
③　活動の効果等	生成 AI を活用した授業実践および業務改善により、生徒の学習意欲や授業の質、教職員の業務効率において、次のような効果が見られた。 **１．生徒の主体性と探究心を刺激する** 生成 AI は生徒の問いや思考に即時に応答することができるため、知的好奇心を刺激して「もっと知りたい」という意欲を引き出した。これにより、生徒の学びに対する関心や主体性が高まり、自発的に学ぶ姿勢が育まれた。 **２．社会と学びのつながりを実感する** 模擬裁判や資産形成、裁判例をもとにした AI による判決文の生成など、実社会と結びついた活動を通じて、生徒は学びの実用性や社会との関わりを実感した。その結果、学ぶ意義への理解が深まり、学習意欲の向上につながった。 **３．自分の力で解決しようとする** 英作文の添削では、生成 AI が誤りの指摘だけでなく、その理由や改善方法を即時に提示することで、生徒は自らの力で英作文を添削・改善し、学習への自信と自己効力感が育まれた。結果的に、教員の添削時間の削減にもつながった。 **４．教員の業務の効率化で、教育の質の向上につながる** 生成 AI の活用により、従来教員が手作業で行っていた一部の業務を効率化することが可能となった。例えば、英語科における音声教材の作成では、従来 30 分程度かかっていた録音・編集作業が約１分で完了し、音質も安定するようになった。こうして生まれた時間を授業準備や教材研究に充てることで教育内容の質的向上にもつながっている。
活動の様子	

リアルタイムに物体認識する AI の制作（情報科）

ChatGPT で自身の英作文を添削してブラッシュアップ（英語科）